

徳島大学歯学部への教育改善に向けてのアンケート調査実施と結果

歯学部自己点検・評価委員会

1. はじめに

徳島大学では、中期目標として、教育プログラムの成果を検証し、改善に結びつけるために、卒業生と卒業生の研修先に対して、卒業生の学力や資質・能力に関するアンケートを実施し、教育カリキュラムの改善に結びつけることが挙げられている。

このため、歯学部自己点検・評価委員会では、1364人の卒業生全員と過去に複数の卒業生が研修を行った大学病院を対象としてアンケートを実施した。表1に卒業年度別アンケート対象卒業生を示す。

表1 アンケート対象卒業生の人数

年度	57	58	59	60	61	62	63	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
人数	53	46	58	56	59	61	62	61	59	59	59	59	50	62	55	50	49	51	55	65	55	53	65	62

アンケートの実施期間は、平成18年10月上旬から11月上旬までの1ヶ月間として、無記名方式で行った。アンケートの回収結果は、卒業生57人(回収率4.2%)、就職先は17施設(回収率50.6%)であった。図1に回答者の臨床経験を示す。20年以上の臨床経験の割合が最も高いが、臨床経験の短いものから長いものまで広い範囲から回答があったことが分かる。

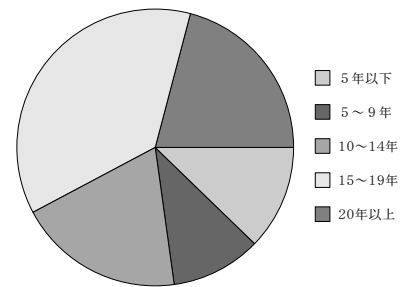


図1 臨床経験

2. アンケート実施方法について

資料1と資料2に研修先の大学病院および卒業生に送付したアンケートを示す。A4用紙に収まるようにした。

アンケート用紙は、FAXにて歯学部事務室に返信してもらう方式とした。

資料1 卒業生へのアンケート

資料2 研修先アンケート

アンケート

送り先 徳島大学歯学部第2総務係
FAX: 088-631-4215

FAX: 088-631-4215

あなたのプロフィールについて		その他の場合の記載欄
歯学部卒業年度		
大学院修了年度		
勤務先	開業、歯科医院勤務、病院歯科勤務、大学勤務、大学院	

あなたのプロフィールについて		その他の場合の記載欄
年齢	(30代、40代、50代、60代以上)	
勤務先	大学病院、歯科医院	

あなた自身に関する下記の事項について評価してください。
該当する項目を○で囲ってください。

ただし、早期体験実習およびチュートリアルは経験者のみ評価してください。

	歯科医師・社会人としての下記の項目の重要度	歯科医師・社会人としての下記の項目達成度	あなたの能力向上における徳島大学歯学部の教育貢献度	徳島大学歯学部の教育における下記の項目の必要性・重要度
一般教養	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
外国語	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
基礎知識	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
隣接医学	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
臨床専門知識	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
早期体験実習		(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
研究基礎ゼミ		(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
基礎系科目実習		(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
臨床系基礎実習		(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
ボリクリ		(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
チュートリアル		(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
臨床実習		(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)

徳島大学歯学部での大学教育に関するご意見をご自由にお書きください。

採用された徳島大学歯学部卒業生を対象として、下記の項目について評価してください。該当する項目を○で囲ってください。

	歯科医師・社会人としての下記の項目の重要度	歯科医師・社会人としての下記の項目達成度	卒業生の能力向上における徳島大学歯学部の教育貢献度	徳島大学歯学部の教育における下記の項目の必要性・重要度
一般教養	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
態度	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
外国語	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
基礎知識	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
隣接医学	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
臨床専門知識	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)
臨床技能	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)	(高・中・低)

徳島大学歯学部での大学教育に関するご意見をご自由にお書きください。

3. アンケート結果について

図2に、“一般教養”、“外国語”、“基礎知識”、“専門知識”、“隣接医学”、“技能”および“態度”の7項目についての研修先の大学病院のアンケート結果について示す。

研修先の大学病院から見ると、上記7項目のうち、“外国語”を除く6項目について歯科医師として臨床を行う上で重要度が高い。特に“態度”に関しては、臨床歯科医師として最重要項目としてあげられる。しかし、研修先から見ると、残念ながら重要性が高いとしてあげられた6項目の本大学の卒業生の達成度および貢献度の評価は中程度である。特に重要度が最も高いと評価された“態度”に関しては、卒業生の達成度が低いと評価されたのものが含まれている。本学歯学部では、歯学部教育の中に平成14年まで態度教育が導入されていなかったのが原因と考えられる。

一方、“外国語”については、重要度は中程度と他の項目より低く評価されている。しかし、卒業生の達成度は他の項目と同様、比較的高く評価されている。“外国語”に関しては、近年のインターネット等の普及により、最新の歯科医学情報が容易に日本語で手に入れることができるような環境が整備されたからかもしれない。

以上の結果から、歯科医師を養成する歯学部としては、“態度”、“専門知識”、“技能”、“基礎知識”、“隣接医学”の順に歯学部での教育の必要性・重要度が高いと評価される。

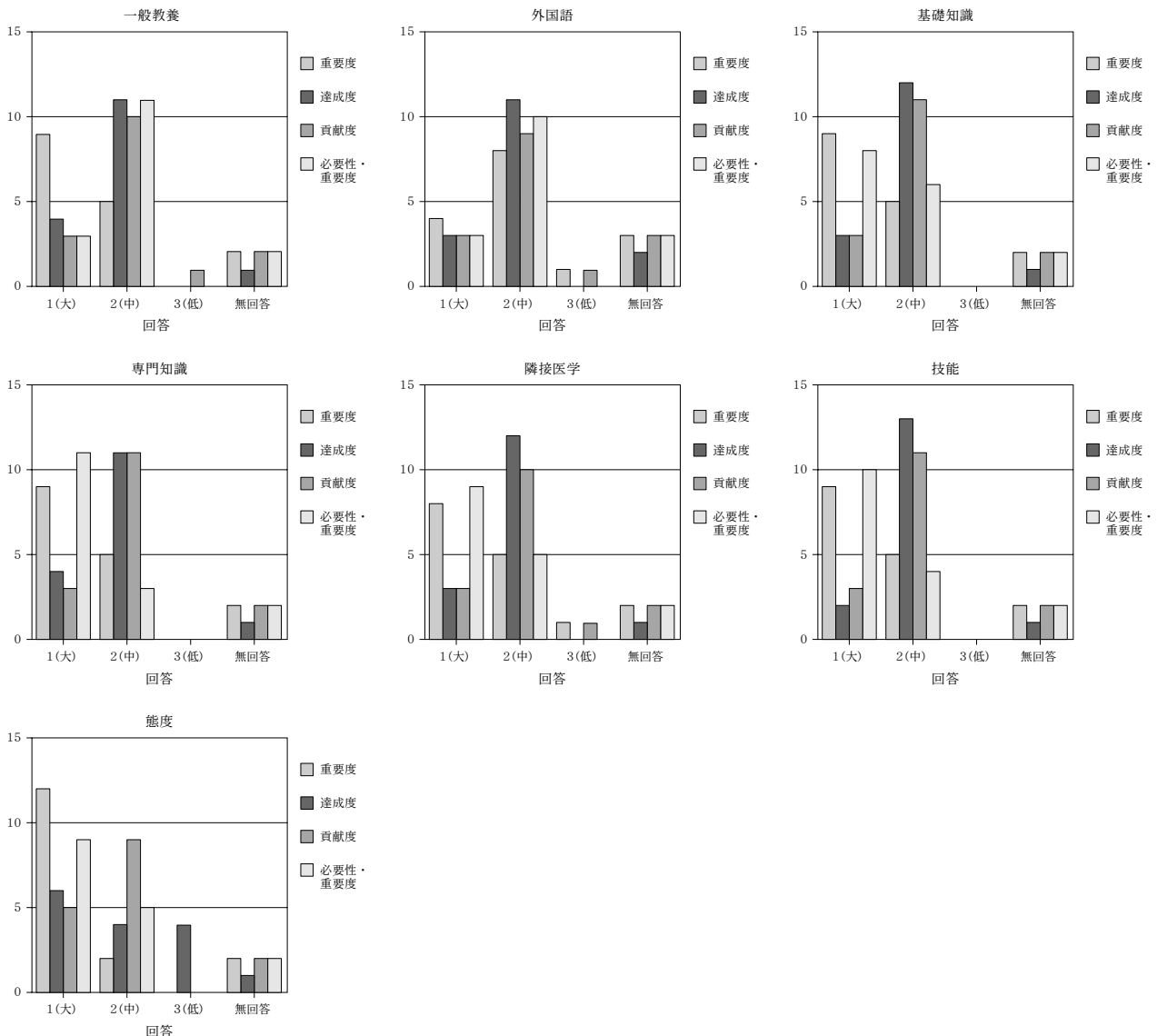


図2 研修先へのアンケート結果

図3に、卒業生のアンケート結果を示す。卒業生から見ると、“一般教養”、“外国語”、“基礎知識”、“専門知識”、“隣接医学”の5項目のうち、研修先と同様、“一般教養”、“基礎知識”、“専門知識”、“隣接医学”の4項目ともに、専門職の歯科医師として重要度が高いと指摘している。しかし、大学教育の重要性・必要性は、“専門知識”と“隣接医学”では高く、“一般知識”、“基礎知識”では中程度と評価している。前述の4項目の達成度の自己評価は、中程度と評価するものが多い。それらを達成するための大学教育の貢献度も、中程度と評価するものが多い。しかし、“一般教養”、“基礎知識”、“隣接医学”に関しては、大学教育の貢献度は低いと評価するものも多く見受けられる。

一方、研修先が低く評価した“外国語”については、研修先と同様の評価であり、歯学部教育の重要度・必要性も他の項目と比べて低く評価されている。しかも、外国語の達成度と歯学部教育の貢献度は非常に低くなっている。

現在、平成14年度から歯科医学のコアカリキュラムを導入した新しい教育プログラムを開始し、共通教育ではTOIECを用いた英語教育の実施、3年次学生への歯科英語の授業実施、問題解決型のチュートリアルを導入など新しい取り組みを行っている。このような卒業生の評価は、歯学部教育改革を行う上で重要であり、教育プログラムの改善に活かしていかなければならない。

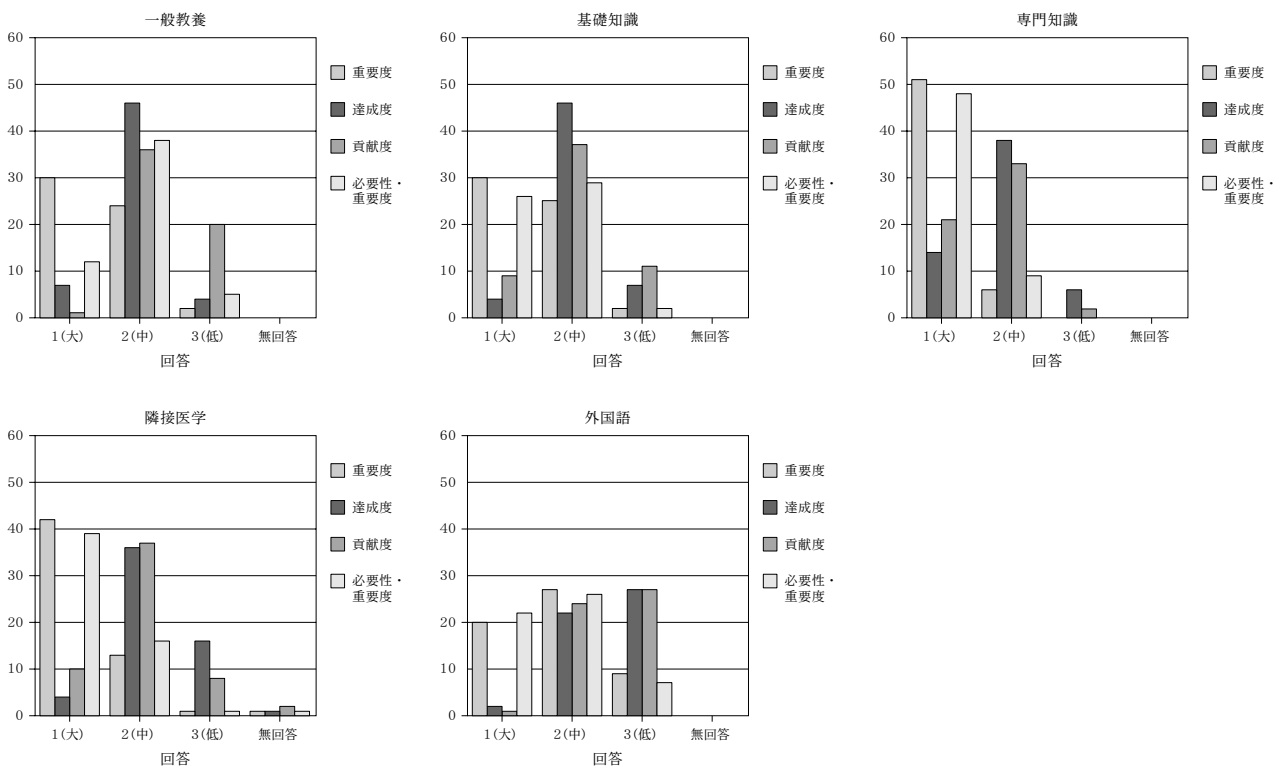


図3 卒業生のアンケート

図4に、歯学部で行われている6項目の実習（早期体験実習、研究基礎ゼミ、基礎系基礎実習、臨床系基礎実習、ポリクリ、臨床実習）についてのアンケート結果を示す。

“早期体験実習”、“研究基礎ゼミ”に関しては、受講していない卒業生は、無回答として扱っている。

“早期体験実習”、“研究基礎ゼミ”、“基礎系基礎実習”、“臨床系基礎実習”、“ポリクリ”および“臨床実習”の6項目のうち、“早期体験実習”、“臨床系基礎実習”、“ポリクリ”、“臨床実習”の4項目について、歯学部教育の重要度が高い。この4項目は、現在従事している臨床に直接関連する実習であるため、必要度・重要度が当然高くなる。しかし、必要性・重要度を中程度、または低いと評価するものもいること、それぞれの能力への貢献度の評価は決して高くないことから、実習の方法に何らかの問題があるのかもしれない。特に“早期体験実習”、“臨床系基礎実習”および“ポ

リクリ”に関しては、高く評価するものと中程度と評価するものの差が小さいことから、実施方法の改善が必要と考えられる。一方，“研究基礎ゼミ”，“基礎系基礎実習”は、他の臨床系の実習に比べて必要度・重要度の評価が低いが、能力向上への貢献度は中程度と、他の臨床系実習と同様の評価である。

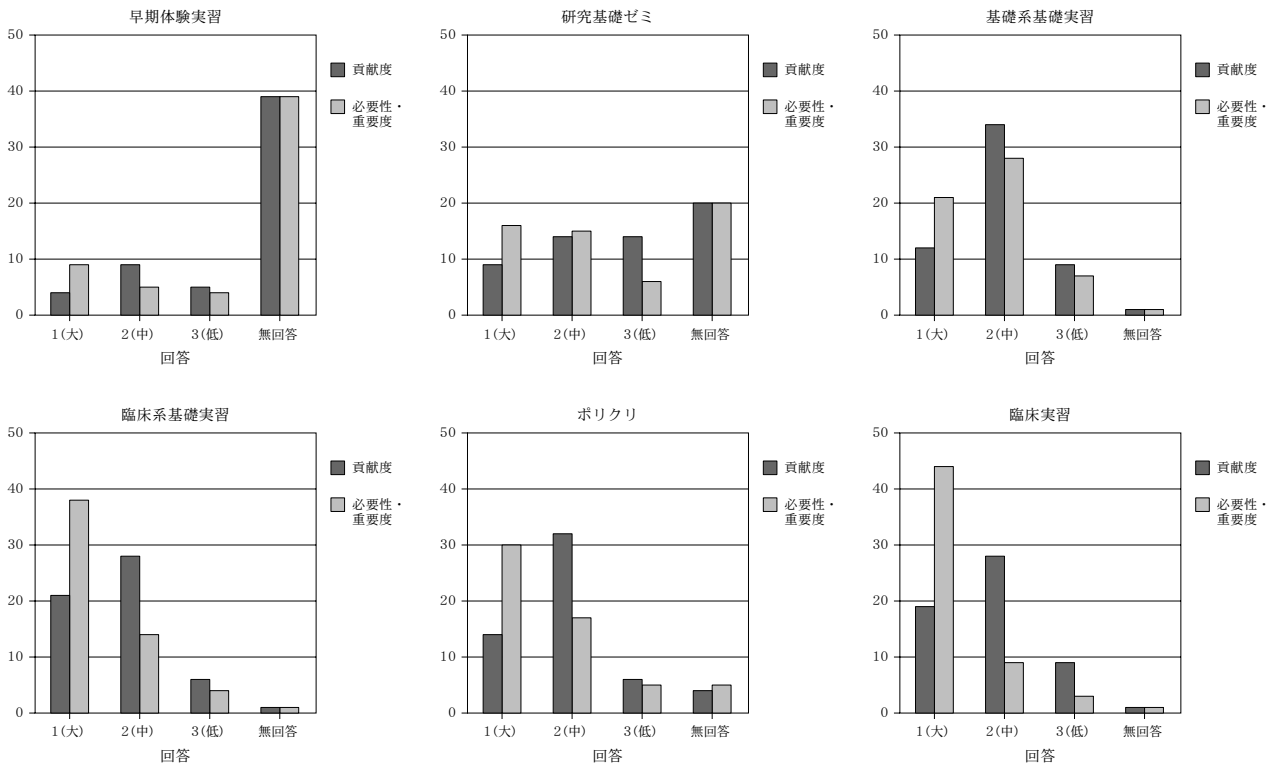


図4 実習に対するアンケート結果

以上のように、研修先および卒業生ともに“専門知識”と“隣接医学”について歯学部教育に期待している。また、卒直後の歯科医師として必要な“技能”，“態度”の修得を歯学部教育に期待している。

現在、歯学部では、ここ数年、問題解決型学習法のチュートリアル授業やコミュニケーションに関する講義・演習を取り入れている。また、臨床実習を見学中心から体験型実習へ変えつつある。このような取り組みは、幸いにも研修先、卒業生からの歯学部への教育への期待と一致している。

4. 自由意見

今回のアンケートでは、個別に歯学部教育に関して自由に意見を書いてもらった。研修先のアンケートでは1件、卒業生のアンケートでは18人（回答率31%）が自由意見を記載している。

研修先のアンケートでは、全体的に中程度の評価であり、特に基本的な臨床技能、包括的医療についての知識やコミュニケーションスキルについて修得が不十分との厳しい意見があった。

一方、卒業生のアンケートでは、全体的に見ると卒前臨床実習での治療経験不足やコミュニケーション、コーチングなどの人間学のような教育を望む声が多かった。

現在、コアカリキュラムの中に“医の倫理と態度”の講座を開講している。まだまだ“人間学”にはほど遠いかもしれないが、これらを充実させることにより対応できるものとする。また、臨床実習に関しては、見学型から体験型へ移行中である。

表2に、臨床経験別に卒業生の自由意見の総括を示す。歯学部全体でこれらの意見を率直に受け止め、カリキュラムに反映していかなければならない。

表2 卒業生の自由意見

臨床経験	自由意見の総括
5年以下	臨床系講義の見直し，人間学の開設
5～9年	臨床実習の充実（体験型へのシフト），人間学の開設
10～14年	人間教育のための講義・演習の導入
15～20年	基礎系講義と臨床系講義の連携，統合講義が必要
25年以上	インプラントなどの専門臨床教育

5. おわりに

本年度、歯学部創立30周年を迎え、卒業生も1300人を越えた。また、平成16年4月には、ヘルスバイオサイエンス研究部に改組され、これまでの学部教育中心から大学院教育、研究中心となった。しかし、歯科医師養成を目的とした歯学部教育が、今後も教育の中心となることは間違いない。

今回、創立30周年を機に、はじめて研修先および卒業生のアンケートを行った意義は大きい。

本報告ではアンケートの概略を示したが、歯学部教務委員会が歯学部での歯科医学教育カリキュラムを改善・検討する基礎資料としてこのアンケート結果を有効利用して頂くことを期待する。